

〈研究ノート〉

短大生の教育実習が進路選択に対する自己効力と進路成熟に与える影響

—共分散構造分析による検討—

清水 洋生¹⁾・牛尾 直行²⁾

The effect of student teaching on Career Decision-Making Self-Efficacy and career maturity in junior college students: A covariance structure analysis

Hiroo SHIMIZU¹⁾ and Naoyuki USHIO²⁾

Abstract

This study administered a questionnaire survey to students registered at a junior college (77 women and 4 men) to examine junior college students' career decision-making self-efficacy and its relationship to their career maturity. The questionnaire comprises the Career Decision-Making Self-Efficacy Scale and Career Readiness Scale (Sakayanagi, 1996). For this study, a predictive model was set based on the hypothesis that career decision-making self-efficacy influences career maturity from course selection through to work. The hypothesis was evaluated using covariance structure analysis. Those analyses showed a strong relationship between career decision-making self-efficacy and career maturity. Moreover, results showed that junior college students with a high career decision-making self-efficacy also had high career maturity.

Key words: career decision-making self-efficacy, career maturity, student teaching

1. 緒 言

Bandura (1977)³⁾の提唱した自己効力とは、ある行動が自分にうまくできるかという可能性の自分自身における判断であり、自己効力の高低が活動を決定付ける誘因とされている。自己効力理論に関する実証的研究は、Bandura, Adams, & Beyer (1977)⁴⁾のヘビ恐怖症の治療場面での研究から始まり、その後、スポーツ選手の競技力¹⁶⁾、喫煙の休止⁸⁾、QOL¹¹⁾など、多岐にわたる分野において理論的、

応用的研究が進められてきた。本研究の領域である進路選択、キャリア形成においても同様に、自己効力理論を援用した研究がなされてきた。Hackett & Betz (1981)⁹⁾が女性の進路発達を理解するために自己効力理論からアプローチしたことに始まり、男性中心職業に対する女性の自己効力 (Matsui, 1994)¹⁴⁾、職業の具体的内容に対する自己効力 (Osipow, 1991)¹⁸⁾、自己効力と就業動機、職業未決定の関連 (安達, 2001)¹⁾、大学生の就職活動における自己効力 (佐藤, 2016)²⁰⁾などさまざまな分野において発展を見せている。

このような、進路選択、キャリア形成分野における自己効力理論研究の中心をなす概念が進路選択に対する自己効力 (Career decision-making Self-efficacy) であり、進路選択に対する自己効力とは、自分

1) 新島学園短期大学コミュニティ子ども学科
Department of Community Child Studies, Nijjima Gakuen Junior College

2) 順天堂大学スポーツ健康科学部
School of Health and Sport Science, Juntendo University

の進路選択についてどのような分野に対して自信を持っているか (Betz & Hackett, 1986)⁵⁾である。また、ここでいう進路選択は具体的な職業の選択と、その職業に就くために必要な教育の選択の両方を指すことが多い (廣瀬, 1998)¹⁰⁾。

進路選択に対する自己効力についての研究は、例えば、女子高校生の大学進学動機に影響を及ぼし (Matsui & Onglatco, 1992)¹⁵⁾、進路選択に向かう態度に影響を及ぼし (Luzzo, 1993)¹³⁾、高い進路選択に対する自己効力を持つ者は、低い自己効力を持つ者よりも就職の内定率が高いことが明らかになっている (浦上, 1994)²⁶⁾。

Taylor & Betz (1983)²³⁾は、進路選択に必要な自己効力を測定する尺度として、Career Decision-Making Self-Efficacy Scale: CDMSEⁱ (進路選択に対する自己効力尺度) を作成している。これは、Crites (1965)⁶⁾のキャリア成熟モデルにおける進路選択能力を根拠に進路決定行動の自己効力を測定する尺度である。

進路選択、キャリア形成領域について、我が国では、進路未決定に関する研究 (若松, 2001)²⁷⁾、職業興味と結果期待の関係 (Adachi, 2004)²⁾、就職不安に関する研究 (西山, 2003)¹⁷⁾などが盛んに行われている。

このように、進路選択に対する自己効力の研究は、様々な対象に対して、あらゆる変数との関連をみた研究は数多くある。しかし、キャリア教育において重視される、進路成熟との関連については、あまり検討されていない。進路成熟とは、「進路発達課題に取り組もうとする個人の態度的認知的レディネス (Super, 1984)²²⁾」であり、Crites (1973)⁷⁾によって最初に使用された“career maturity”の訳語で、「キャリア成熟」ともいわれている。進路選択に対する自己効力と進路成熟との関連をみた研究は、浦上 (1993)²⁵⁾があるが、調査実施年が二十余年前であることから観照すれば、現在との雇用状況の変化、景気の変化、また、それらに影響された若者の進路選択や職業意識に対する変化が生じていることは想像するに容易い。さらに、彼の調査は高校

生を対象とした調査である。本研究は、短大生を対象であり、我が国において進路選択に対する自己効力と進路成熟との関連について、短期学生を対象とした調査研究が少ない現状から鑑みれば、本研究の独創性が認められるだろう。加えて、短大生は、2年間という短い期間で進路選択をしなければならない。その中で教育実習に臨むが、実習先で出会う保育者は、仕事量の多さや勤務時間の長さ、賃金の問題が絡み合うことより、大きな負担感を抱えている (楠本・池田, 2012)¹²⁾。通過儀礼ともいべき教育実習において、保育者の状況を目の当たりにした短大生は、自らの進路に対し不安や懸念を抱き、進路成熟に負の影響を及ぼすかもしれない。そのような短大生を早期に、且つもれなくキャリア支援すべく、進路選択に対する自己効力や進路成熟を可視化することが望まれる。以上を総合的に捉えれば、本研究で短大生の進路選択に対する自己効力と進路成熟の関連を明らかにすることは、それらのキャリア支援の指標としての有用性を明らかにするためにも重要であろう。さらに、本研究では、進路選択に対する自己効力と進路成熟との関連をモデル化し、構成概念間の因果関係を共分散構造分析を用いて明らかにする。加えて、本研究での目的の一つは、尺度の確定である。本研究で使用する尺度は、次研究の予備的調査であり、分析検討によって併せて次研究における尺度の確定も行う。

2. 方 法

2.1 調査対象・調査時期

進路選択に対する自己効力と進路成熟との関連を明らかにするために、短大生を対象に質問紙調査を実施した。調査は、2016年10月から2017年2月にかけて講義や教育実習オリエンテーションの時間を使い一斉に実施され、終了後に回収する方法をとった。そのうち、回答に不備のない81名 (女子77名、男子4名、平均年齢19.62歳) を分析に使用した (有効回答率97.6%)。

2.2 倫理的配慮

本研究は、新島学園短期大学研究倫理委員会の承

認を受けて実施された。

2.3 尺度

1) 進路選択に対する自己効力尺度(以下 CDMSES と略記する)

Taylor & Betz (1983)²³⁾によって作成された CDMSE を基に、富安(1997)²⁴⁾の大学生用進路選択決定自己効力尺度日本語版(CDMSE-U: J)を参照して尺度構成した。CDMSE (Taylor & Betz, 1983)²³⁾は、進路選択能力に関連する5つの要素から進路選択に対する自己効力を測定している。5つとは、(1) accurate self-appraisal, (2) gathering occupational information, (3) goal selection, (4) making plans for the future, (5) problem solving である。5つの態度領域は、それぞれ10項目ずつ、9(Complete Confidence; 非常に自信がある)~0(No Confidence; 自信がない)の10件法で行動を測定している。項目総数は50項目である。富安の構成した CDMSE-U: J は、CDMSE を翻訳、修正し、さらに追加された尺度である。CDMSE-U: J も CDMSE 同様に、5つの下位尺度から構成されている。項目総数は54項目、4件法である。

本尺度を構成するにあたり、測定対象者の属性の違い(「大学院など進学したい学校」を「大学など進学したい学校」に変更)、時代背景の違い(「就職情報誌や役所の広報誌などで情報を入手」を「インターネットなどを利用」に変更)などに留意し、短大生の進路選択に対する自己効力を測定する CDMSES を構成した。尺度は、Taylor & Betz (1983)²³⁾、富安(1997)²⁴⁾同様、5つの下位尺度から構成されている。

- ① 進路選択 (goal selection)
- ② 情報収集 (gathering occupational information)
- ③ 自己評価 (accurate self-appraisal)
- ④ 計画立案 (planning for the future)
- ⑤ 問題解決 (problem solving for the future)

質問項目は45項目、回答方法は「5. 非常に自信がある」、「4. 少し自信がある」、「3. どちらとも

Table 1-1 下位尺度「進路選択」に対する質問項目

①進路選択 (goal selection)
1. 自分にとって理想の職業とは何かを明確にすること。
6. 将来どのような生活を送りたいのかをはっきりさせること。
16. 就職する目的を明確にすること。
21. 卒業後、自分が何をやりたいのかを明確にすること。
26. 将来従事したい職業が何なのかをはっきりさせること。
31. 今後5年間の進路目標を設定すること。
36. 将来、自分は何を成し遂げたいのかをはっきりさせること。
11. 自分の将来の姿を想像することができること。
41. 進路決定までの時間的な展望をもって、計画的に勉強できること。

Table 1-2 下位尺度「情報収集」に対する質問項目

②情報収集 (gathering occupational information)
2. 職業情報を得るために、インターネットを利用すること。
7. 自分が従事したい職業についている人から、その仕事内容について聞くこと。
12. 採用面接がうまくいくように情報を収集すること。
17. 自分が就きたい職業の採用状況に関する情報を入手すること。
22. 自分の職業選択に必要な情報を得るために、新聞・テレビ・インターネットなどを利用すること。
27. 進路目標実現のための情報を得るために、すでに就職した先輩から情報を得ること。
32. 自分が所属する学部・学科の最近の進学・就職状況について、情報を得ること。
37. 自分が進みたい職場(同職種)を見学し、必要な情報を集めること。
42. 大学など進学したい学校についての情報を入手できること。

言えない」、「2. あまり自信がない」、「1. 全く自信がない」、の5件法で求めた。それぞれの下位尺度に対する質問項目を Table 1-1 から Table 1-5 に示す。

Table 1-3 下位尺度「自己評価」に対する質問項目

③自己評価 (accurate self-appraisal)
3. 自分がどのような職業分野に向いているのを知ること.
8. 自分の性格を理解すること.
13. 自分にとって興味のある職業分野を知ること.
18. 自分の能力を生かせる職業分野を知ること.
23. 自分の能力を正確に把握すること.
28. 自分の価値観にあった職業分野を明確にすること.
33. 自分の職業に対する適性を正確に把握すること.
38. 自分自身についてより深く理解すること.
43. 自分の進路について友人と話し合い, 有益な意見があれば参考にすることができること.

Table 1-4 下位尺度「計画立案」に対する質問項目

④計画立案 (planning for the future)
4. 見通しを立てて就職活動を行うこと.
9. 将来のために在学中にやっておくべきことの計画を立てること.
14. 進路目標を達成するために, 計画を立てること.
19. 将来の仕事において役立つと思われる免許・資格取得の計画を立てること.
24. 将来の進路で役に立ちそうな, 専攻外の勉強の計画を立てること.
29. 志望職業の実現に向けて, 実行可能な計画を立てること.
34. 就職活動の計画を具体的に立てること.
39. 進路目標を達成するために, 念入りに計画を練ること.
44. 希望の就職がうまくいかなかった場合, 対処する方法を考え出すことができること.

2) キャリア・レディネス尺度 (Career Readiness Scale : 以下 CRS と略記する)

進路成熟の測定については, 坂柳 (1996)¹⁹⁾ の CRS をそのまま使用した. CRS が構成されたのは二十余年前であるが, 項目内容, 尺度構成の要素, などから再検討, 吟味した結果, 現在使用しても大きな問題はないと判断したため修正・追加なしでそのまま使用することにした.

この尺度は, ①主に人生や生き方への取り組み姿勢である「人生キャリア・レディネス (Life Career Readiness: LCR)」と, ②主に職業選択と職業生活

Table 1-5 下位尺度「問題解決」に対する質問項目

⑤問題解決 (problem solving for the future)
R5. 希望していた職業に就くのが困難ならば, すぐあきらめて別の職業を選ぶこと.
10. 就きたい職業に就けるのであれば, 少々の苦勞でも我慢すること.
15. 家族が勧める職業でも自分に合わないと思えばはっきりと断ること.
20. 希望職業に就くためには, 採用試験に失敗しても粘り強くがんばること.
25. 自分が希望した仕事で困難な問題が生じた場合でも, それが解決するまで粘り強く続けること.
30. 本当に好きな職業に就くためならば, 遠近や地域を問わず, どこにでもいくこと.
35. 自分の志望する職業に対して, 家族が反対しても説得して理解を得ること.
40. 就職の機会が減少しつつある職業分野であっても, 希望する職業分野であれば, それを選ぶこと.
45. 一度就職した職業が不満ならば, 職業を変えることができること.

Note : Table 1-1 から Table 1-5 の左記数字は設問番号を, 番号の前に付いている「R」は逆転項目を示している.

への取り組み姿勢である「職業キャリア・レディネス (Occupational Career Readiness: OCR)」の2系列からキャリア・レディネスを設定している. また, それぞれのレディネス構成要素(構成領域)は, 以下の3つの態度特性によって構成されている.

- ① 関心性 (concern)……自己のキャリアに対して, 積極的な関心をもっているか.
- ② 自律性 (autonomy)……自己のキャリアへの取り組み姿勢が, 自律的であるか.
- ③ 計画性 (planning)……将来展望を持ち, 自己のキャリア・レディネスに対して, 計画的であるか.

さらに, 上記3領域は, それぞれ3つの要素で構成されている. 3領域を構成する3つの要素は, 以下の通りである.

- ① 領域:「関係性」…要素「志向性」,「探索性」,

- 「一体性」
- ② 領域：「自律性」…要素「主体性」,「責任性」,「向上性」
- ③ 領域：「計画性」…要素「展望性」,「目標性」,「現実性」

Table 2 に CRS の構成を示す。さらに、3 領域の構成要素と質問項目との関係を、Table 3、Table 4 に示す。

質問項目は、人生キャリア・レディネス、職業キャリア・レディネスともに25項目、回答方法は、「5. よくあてはまる」、「4. ややあてはまる」、「3. どちらとも言えない」、「2. あまりあてはまらない」、「1. 全くあてはまらない」、の5件法で求めた。人生キャリア・レディネスの下位尺度に対する質問項目を Table 3 に、職業キャリア・レディネスの下位尺度に対する質問項目を Table 4 に示す。

2.4 パスダイアグラム

1) パスダイアグラムの仮定

進路選択に対する自己効力と進路成熟との関連をはかるために、Figure 1 のようなパスダイアグラムを仮定した。Figure 1 のパスダイアグラムを仮定した理由は、以下の通りである。

浦上 (1993)²⁵⁾は、進路選択に対する自己効力と進路成熟との関連について、自己効力理論では、自己効力と行動との間に因果関係を設定し、与えられた課題についての自己効力・効力期待から、その課

題に対する実際の行動を予測できるとしている。すなわち、CDMSE などによって測定される進路選択に対する自己効力は、その後の取り組みを規定していると考えられる。本研究で実施する CDMSES も前述の通り、CDMSE を基に富安 (1997)²⁴⁾ の CDMSE-U:J を参照して構成した尺度であることから、同様のことが言えよう。さらに、下山 (1983)²¹⁾は、主体的に進路を選択しようとしている者、あるいはそのような進路選択の経験のある者は、進路発達段階が高いということを示している。これらのことから、進路選択への取り組み方の違いというのは、その後のキャリア形成や進路成熟の程度の差としてあらわれるといえる。このように、進路選択に対する自己効力は、進路選択へのさまざまな取り組み方を通して、進路成熟に影響を及ぼすと考えられる。したがって、進路選択に対する自己効力 (SECD) から進路成熟 (LCR, OCR) へのパスを仮定した。

3. 結 果

3.1 尺度の検討

1) 進路選択に対する自己効力尺度 (CDMSES)

CDMSES の内的整合性を検討するために、クロンバックの α 係数を算出した。その結果、各下位尺度の値は、目標選択 (0.891)、情報収集 (0.803)、自己評価 (0.861)、計画立案 (0.851)、問題解決 (0.736)、であった (Table 5)。したがって、各下位尺度の内的整合性は十分に高いと言える。また、

Table 2 キャリア・レディネス尺度の構成要素

系列	領域	人生キャリア・レディネス尺度： LCR	職業キャリア・レディネス尺度： OCR
キャリア関心性 Career Concern: CC		人生キャリア関心性 Life Career Concern: LCC	職業キャリア関心性 Occupational Career Concern: OCC
キャリア自律性 Career Autonomy: CA		人生キャリア自律性 Life Career Autonomy: LCA	職業キャリア自律性 Occupational Career Autonomy: OCA
キャリア計画性 Career Planning: CP		人生キャリア計画性 Life Career Planning: LCP	職業キャリア計画性 Occupational Career Planning: OCP

Note : 坂柳 (1996) を参照し作成した。

Table 3 人生キャリア・レディネス尺度の各領域、各要素における質問項目内容

領域	要素	項 目 内 容
関 心 性	志向性	1. これからの人生や生き方について、とても関心を持っている.
		10. 人生設計や生き方についての記事については、よく目を通すようにしている.
		R19. 人生設計や生き方にはあまり関心がない.
	探索性	2. 希望する人生を送るにはどうすればよいか、調べたことがある.
		11. どのような人生・生き方があるか、本や新聞などで読んだことがある.
		20. 今後の人生を充実させるために参考となる話に、耳を傾けるようにしている.
	一体性	3. どのような生き方が自分に向いているのか、真剣に考えたことがある.
		R12. 自分は何のために生きていくのか、真剣に考えたことがない.
		21. 将来の生き方は自分にとって重要な問題なので、真剣に考えている.
自 律 性	主体性	4. これからの人生は、自分の力で切り開いていくことができる.
		R13. 人生をどう過ごすかは、他の人が考え始めるころに、自分も考えればよい.
		R22. これからの人生をどう過ごすかは、周囲の雰囲気にあわせて決めようと思う.
	責任性	5. どんな生き方をしていけばよいかは、最終的には、自分自身の責任で決める.
		14. これからの人生は、自分で責任を自覚して送ろうと思う.
		R23. まだしばらくの間は、責任のある生活はしたくない.
	向上性	6. 希望する人生を送れるように、日頃から自分を向上させるように心掛けている.
		15. 今後の人生で困難なことに突き当たっても、自分なりに克服していこうと思う.
		24. 人生を充実させるためには、面倒なことでも積極的にチャレンジする.
計 画 性	展望性	7. 希望する生き方を送るための具体的な計画を立てている.
		R16. 自分は将来どのような人生を送っているのか、わからない.
		25. 自分の今後の人生は、だいたい想像できる.
	目標性	R8. どのような生き方をしたいのか、まだわからない.
		17. これから先どのような人間になりたいのか、自分なりの目標をもっている.
		R26. 希望している生き方は、まだすぐ変わるかもしれない.
	現実性	9. 充実した人生を送るための計画に沿って、すでに取り組んでいることがある.
		18. これからの人生設計は、自分の個性と社会状況の両面から十分考えている.
		27. 希望している人生や生き方は、自分なりに実現できそうだと思う.

Note: 左記の数字は設問番号を、番号の前に付いている「R」は逆転項目を示している.

下位尺度ごとに項目-全体得点相関(I-T相関)を求めたところ、各下位尺度の信頼性を大きく下げる項目は見つからなかった.

本研究での目的の一つは、次研究で行われる調査に先駆けての予備的調査の実施、すなわち、尺度の確定であった。クロンバックの α 係数、I-T相関な

どから判断して、CDMSESの内的整合性は十分高いと判断される。そのため、次研究で実施する質問紙調査では、本研究で使用された全45項目を採用することとする。

2) キャリア・レディネス尺度(CRS)

CRSも同様に、尺度の内的整合性を検討するた

Table 4 職業キャリア・レディネス尺度の各領域、各要素における質問項目内容

領域	要素	項目内容
関心性	志向性	1. 将来の職業や就職について、とても関心を持っている。
		10. 職業や就職に関する記事には、よく目を通すようにしている
		R19. 将来の職業生活をどう過ごすかは、あまり関心がない。
	探索性	2. 希望する職業に就くにはどうすればよいか、調べたことがある。
		11. 将来の職業や就職先について、いろいろ比較し検討している。
		20. 将来、充実した職業生活を送るために参考となる話は、注意して聞いている。
	一体性	R3. どのような職業が自分に向いているのか、真剣に考えたことがない。
		R12. 自分は何のために働くのか、真剣に考えたことがない。
		21. 職業選択や就職は自分にとって重要な問題なので、真剣に考えている。
自律性	主体性	4. 職業人になったら、自分から進んで積極的に仕事を行おうと思う。
		13. 職業の準備は、他の人から言われなくても自主的に進めることができる。
		22. 職業の選択・決定では周囲の雰囲気に流されることはない。
	責任性	5. 充実した職業生活を送れないのは、自分自身の責任が大きいと思う。
		14. 職業人になってからは、責任を自覚して仕事に取り組もうと思う。
		R23. 職業人になっても、責任の重い仕事はやりたくない。
	向上性	6. 職場での難しい問題にぶつかっても、自分なりに克服していこうと思う。
		15. 職業生活を充実させるためには、面倒なことでも積極的にチャレンジする。
		24. 職業生活を通して、さらに自分自身を向上させたい。
計画性	展望性	7. 希望する職業に就くための具体的な計画を立てている。
		R16. 自分は将来どのような職業についているのか、わからない。
		25. 自分の将来の職業生活の様子は、だいたい想像できる。
	目標性	R8. どのような職業に就きたいのか、まだわからない。
		17. どのような職業人になりたいのか、自分なりの目標をもっている。
		R26. 今希望している職業は、またすぐ変わるかもしれない。
	現実性	9. 職業選択や就職は、自分の個性と就職機会の両面から十分考えている
		18. すでに計画に従って就職試験のための勉強をしている。
		R27. 就きたい職業は決めたが、それに向けて積極的な努力は特にしていない。

Note : 左記の数字は設問番号を、番号の前に付いている「R」は逆転項目を示している。

めに、LCR, OCR とともにクロンバックの α 係数を算出した。その結果、LCRの α 係数は、LCC (0.762), LCA (0.749), LCP (0.891), OCRの α 係数は、OCC (0.770), OCA (0.811) OCP (0.861), であった (Table 5)。したがって、LCR, OCR とともに各下位尺度の内的整合性は十分に高いと言える。

また、下位尺度ごとに項目-全体得点相関 (I-T 相関) を求めたところ、各下位尺度の信頼性を大きく下げる項目は見つからなかった。

上記同様、本研究での目的の一つは、次研究で行われる調査に先駆けての予備的調査の実施、すなわち、尺度の確定であった。クロンバックの α 係数、

Table 5 進路選択に対する自己効力 (SECD), 人生キャリア・レディネス (LCR), 職業キャリア・レディネス (OCR) 各下位尺度の α 係数

下位尺度		Alpha
SECD	目標選択	0.891
	情報収集	0.803
	自己評価	0.861
	計画立案	0.851
	問題解決	0.736
LCR	LCC (関心性)	0.762
	LCA (自律性)	0.749
	LCP (計画性)	0.891
OCR	OCC (関心性)	0.770
	OCA (自律性)	0.811
	OCP (計画性)	0.861

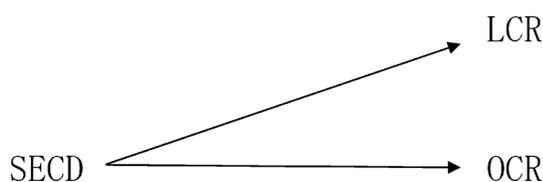


Figure 1 パスダイアグラムの仮定：進路選択に対する自己効力と進路成熟との関係

I-T 相関などから判断して、CDMSES の内的整合性は十分に信頼性が高いと判断される。そのため、次研究で実施される教育実習前後の比較を通して「短大生の教育実習が進路選択に対する自己効力と進路成熟に与える影響」をはかる質問紙調査では、LCR, OCR ともに本研究で使用された全25項目を採用することとする。

3.2 パスダイアグラムの検討

1) 因果モデル

進路選択に対する自己効力と進路成熟との関連をはかるために、因果モデルを設定し、共分散構造分析を行った。因果モデルを構成する SECD, LCR, OCR は、潜在変数である。各潜在変数の観測変数は、SECD を構成する 5 下位尺度、すなわち、目標選択、情報収集、自己評価、計画立案、問題解決、

さらに、LCR, OCR は、LCR については、LCR を構成する LCA, LCC, LCP, の 3 下位尺度、OCR については、OCA, OCC, OCP の 3 下位尺度をそれぞれである。さらに各観測変数は、SECD を構成する 5 因子、LCR, OCR を構成する 3 因子それぞれの下位尺度の合計点数を算出したものである。観測変数間の相関行列、平均値 (M)、標準偏差 (SD) を Table 6 に示す。

修正指数と因果の強さを示すパス係数とその有意確率および各適合度指数の改善の度合いをもとに、モデルの修正を繰り返し、最終的なモデルを導いた。モデルの適合度を示す、GFI, AGFI, CFI, RESEA から検討し、モデルは受容できると判断した (Figure 2)。最終的なモデルを Figure 2 に示す。e6~e7, e8~e9, e10~e11 それぞれの誤差変数間に相関を表すパスを仮定した理由は、挿入するほうがモデルの適合度が高まったためである。

4. 考 察

4.1 進路選択に対する自己効力と進路成熟との関連

本研究の主たる目的は、進路選択に対する自己効力と進路成熟との関連を明らかにするために、両者の関連をモデル化し、構成概念間の因果関係を共分散構造分析を用いて明らかにすることであった。ただし、共分散構造分析の特徴上、得られたデータに適合するモデルは、本研究が設定した以外にも存在し得る可能性があり、本研究の結果の一般化には慎重になる必要がある。これらのことは、十分に肝に銘じなければならない。以上を踏まえて考察する。

まず、SECD から LCR に向かう有意なパス (.95) が確認された (Figure 2)。これは、SECD と LCR には強い関係があることを示している。すなわち、進路選択に対する自己効力が高ければ、LCR も高いことが理解できる。具体的には、自己効力が高い短大生は、「自分の人生や生き方について積極的な関心を示し」、「人生について自分の責任で主体的行動し」、「人生の目標を展望しそれに向け計画的に取り組む可能性が高い」ことなどが質問紙から読みと

Table 6 観測変数間の相関行列, 平均値 (M), 標準偏差 (SD)

目標選択	1.00										
情報収集	0.73	1.00									
自己評価	0.64	0.76	1.00								
計画立案	0.67	0.75	0.76	1.00							
問題解決	0.64	0.58	0.55	0.59	1.00						
LCC	0.55	0.58	0.56	0.50	0.41	1.00					
LCA	0.55	0.59	0.68	0.54	0.59	0.69	1.00				
LCP	0.77	0.55	0.67	0.70	0.64	0.65	0.62	1.00			
OCC	0.57	0.56	0.51	0.51	0.68	0.66	0.64	0.55	1.00		
OCA	0.57	0.57	0.64	0.53	0.71	0.45	0.69	0.50	0.58	1.00	
OCP	0.79	0.58	0.63	0.66	0.60	0.56	0.60	0.76	0.72	0.62	1.00
M	3.32	3.37	3.45	3.08	3.68	3.75	3.87	3.04	3.60	3.87	3.16
SD	0.80	0.65	0.67	0.76	0.68	0.61	0.59	0.81	0.60	0.55	0.79

Note: Significant difference at $p < 0.01$. $n = 81$. (women = 77, men = 4)

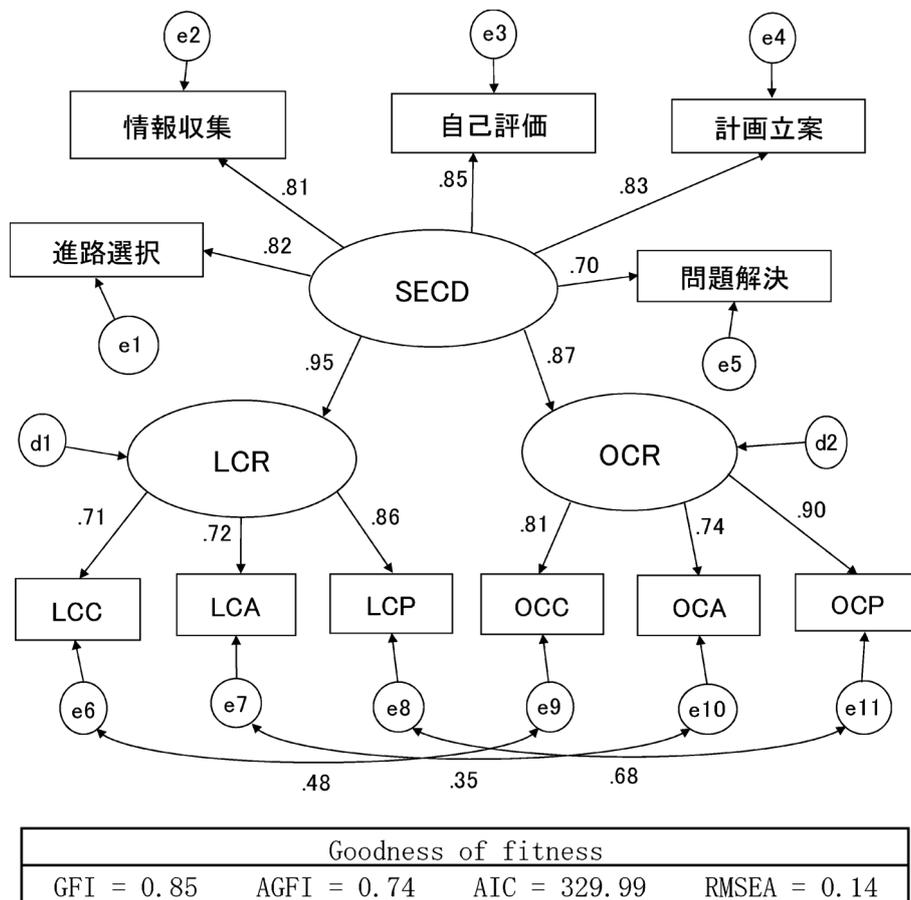


Figure 2 最終的なパスダイアグラムのモデル：進路選択に対する自己効力と進路成熟の因果モデル

れる。

次に、SECD から OCR に向かうパスであるが、こちらにも有意なパス(.87)が確認された(Figure 2)。

ここから、SECD と OCR には強い関係があることが分かる。さらには、SECD が高ければ、OCR も高いことが理解できる。具体的には、自己効力が高

い短大生は、「職業や就職について高い関心を示し」、「職業選択や職業決定を主体的に行い」、「希望する職業に就くための具体的な目標を立て」、「職業に就くための準備を積極的に努力する」ことなどが質問紙から読みとれる。

SECD を説明する 5 つの観測変数を見ると、進路選択 (.82)、情報収集 (.81)、自己評価 (.85)、計画立案 (.83)、問題解決 (.70) とともに十分説明できる値を算出している (Figure 2)。また、LCR を説明する 3 つの観測変数も、LCC (.71)、LCA (.72)、LCP (.86) とともに十分説明しうる値である (Figure 2)。さらに、OCR を説明する 3 つの観測変数を見ると、OCC (.81)、OCA (.74)、OCP (.90) とともに十分説明できる値を算出している (Figure 2)。

以上から、進路選択に対する自己効力と進路成熟の間には、強い関係があることがわかる。この結果は、浦上 (1993)²⁵⁾ が高校生を対象とした研究とほぼ一致するものであり、進路選択に対する自己効力は、後の進路成熟に重要な影響を与えると仮定できる。さらに、高い自己効力を持っていることは、本質的な進路成熟と関連をもっていると考えられる。

この結果から、進路選択に対する自己効力が高い短大生は、進路成熟が高く、進路選択に対する自己効力が低い短大生は、進路成熟が低いことが仮定できる。進路不安や進路不決断に悩む短大生は、進路選択に対する自己効力が低いことが想像できる。短大生は、2年間という短い期間で進路選択決定しなければならない。そのため、特に教育実習で負の進路成熟がなされた際には、早期に、且つもれなくキャリア支援が実施されなければならない。進路選択に対する自己効力や進路成熟が低い短大生を抽出する手立てとして、本研究で確定させた尺度は有用である。

5. 結 論

本研究から、進路選択に対する自己効力と進路成熟との間には強い関連があることが理解され、また、進路選択に対する自己効力が後の進路成熟やさまざまな進路選択分野に重要な影響を与えること、

さらには、進路選択に対する自己効力は進路成熟の予測因子であることなどが示唆できた。

6. 研究の限界と今後の課題

以上の通り、短大生の教育実習が進路選択に対する自己効力と進路成熟に与える影響について検討した。しかし、本研究での調査は、教育実習の前後を比較したものではなく、短大生のある一点を断片的に切り取り、その時点での進路選択に対する自己効力と進路成熟との関連を示したにすぎない。ゆえに、この結果だけでは、進路選択に対する自己効力が後の進路成熟の予測をするとは断言できない。

そこで次研究では、教育実習を経験することで「進路選択に対する自己効力と進路成熟にどのような影響が与えられるのか」について、教育実習前後の比較を通して明らかにする。

脚 注

¹⁾Taylor & Betz (1983)²³⁾は、その論文の中で Career Decision-Making Self-Efficacy Scale を CDMSE と略記している。しかしながら本研究では、Career Decision-Making Self-Efficacy (進路選択に対する自己効力) との混同を防ぐため、Career Decision-Making Self-Efficacy Scale それぞれの頭文字を取って CDMSES と略記する

文 献

- 1) 安達智子 (2001) 進路選択に対する効力感と就業動機、職業未決定の関連について—女子短大生を対象とした検討。心理学研究, 72(1), 10-18.
- 2) Adachi, T. (2004) Career self-Efficacy, Career outcome expectations and vocational interests among Japanese university students. Psychological Reports, 95, 89-100.
- 3) Bandura, A. (1977) Self-efficacy: Toward a unifying theory behavioral change. Psychological Review, 84, 191-215.
- 4) Bandura, A., Adams, N. E., & Beyer, J. (1977) Cognitive processes mediating behavior change. Journal of Personality and Social Psychology, 35, 125-139.

- 5) Betz, N. E., & Hackett, G. (1986) Applications of self-efficacy theory to understanding career choice behavior. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 4, 279-289.
- 6) Crites, J. O. (1965) Measurement of Vocational Maturity in Adolescence: I. Test of the Vocational Development Inventory. *Psychological Monographs*, 79.
- 7) Crites, J. O. (1973) Career Development Process: A Model of Vocational Maturity. In Herr, E. L. (Ed.) *Vocational Guidance and Human Development*. Houghton-Mifflin. 296-320.
- 8) DiClemente, C. C. (1981) Self-Efficacy and Smoking Cessation Maintenance: A Preliminary Report. *Cognitive Therapy and Research*, 5(2), 175-187.
- 9) Hackett, G., & Betz, N. E. (1981) A self-efficacy approach to the career development of women. *Journal of Vocational Behavior*, 18, 326-339.
- 10) 廣瀬英子 (1998) 進路に関する自己効力研究の発展と課題. *教育心理学研究* 46, 343-355.
- 11) 池田道智江, 平野真紀, 坂口美和, 森 京子, 玉田章 (2011) 看護師の QOL と自己効力感が離職願望に及ぼす影響. *日本看護科学会誌*, 31(4), 4_46-54.
- 12) 楠本恭之, 池田隆英 (2012) 保育者の職務の実感を捉える試み. *岡山学院大学・岡山短期大学紀要*, 35, 9-15.
- 13) Luzzo, D. A. (1993) Value of career-decision-making self-efficacy in predicting career-decision-making attitudes and skills. *Journal of Counseling Psychology*, 40, 194-199.
- 14) Matsui, T. (1994) Mechanisms underlying sex difference in career self-efficacy expectations of university students. *Journal of Vocational Behavior*, 45, 177-184.
- 15) Matsui, T., & Onglatco, M. (1992) Career orientedness of motivation to enter the university among Japanese working women. *Journal of Vocational Behavior*, 40, 351-363.
- 16) McAuley, M., & Gill, D. (1983) Reliability and Validity of the Physical Self-Efficacy Scale in a Competitive Sport Setting. *Journal of Sport Psychology*, 5, 410-418.
- 17) 西山 薫 (2003) 就職不安とプロアクティブパーソナリティ特性および自己効力に関する研究. *人間福祉研究*, 6, 134-148.
- 18) Osipow, S. H. (1991) Developing instruments for use in counseling. *Journal of Counseling and Development*, 70, 322-326.
- 19) 坂柳恒夫 (1996) 大学生のキャリア成熟に関する研究—キャリア・レディネス尺度 (CRS) の信頼性と妥当性の検討—. *愛知教育大学教科教育センター研究報告*, 20, 9-18.
- 20) 佐藤 舞 (2016) 大学生の就職活動および自己効力の縦断的研究. *教育心理学研究*, 64(1), 26-40.
- 21) 下山晴彦 (1983) 高校生の人格発達状況と進路決定との関連性についての一研究. *教育心理学研究*, 31, 157-162.
- 22) Super, D. E. (1984) *Career and Life Development. Career Choice and Development*. Duan Brown, Linda Brooks, and Associates, San Francisco: Jossey-Bass Publishers. 193-234.
- 23) Taylor, K. M., & Betz, N. E. (1983) Applications of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision. *Journal of Vocational Behavior*, 22, 63-81.
- 24) 富安浩樹 (1997) 大学生における進路決定自己効力と進路決定行動との関連. *発達心理学研究*, 8, 12-25.
- 25) 浦上昌則 (1993) 進路選択に対する自己効力と進路成熟の関連. *教育心理学研究*, 41, 358-364.
- 26) 浦上昌則 (1994) 女子学生の学校から職場への移行期に関する研究—「進路選択に対する自己効力」の影響—. *青年心理学研究*, 6, 40-49.
- 27) 若松養亮 (2001) 大学生の進路未決定者が抱える困難さについて—教員養成学部の学生を対象に—. *教育心理学研究*, 49, 209-218.

(平成30年3月1日 受付)
(平成30年7月5日 受理)